

Midnight Press WEB

q u a r t e r l y

No.8 2013 December

<http://www.midnightpress.co.jp>

email : mpweb2012@gmail.com

CONTENTS

詩 近澤有孝

midnight critic

福本順次「ぼくの石原吉郎―伝説のあとに―」

midnight winter poem collection

詩の教室「欠落した過去のほうから」小林レント

連載 浅野言朗 「そよ風」

中村剛彦

他人の噂

近澤有孝

お隣りの女の人の
噂を
もひとつお隣りの女の人と大家さん
がしていたのだ
どんな噂なのかは知らないけれど
おおかた面白半分の話
だろうことは
想像するまでもない
妻子のある男とねんごろになっているんだろうとか
その男に棄てられた
口惜しさを
他の男とのただれた情事で
穴埋めをしているらしいとか
いったいそんな他人の噂の
何がそんなに面白いのか
わからない
わからないから
噂話好きの
お隣りさんたちの
輪に入っていかなかったら
いつのまにか
わたしがその噂の主にされていたのだ
まあ別にかまわない
妻子のある男と
ただれた愛憎の日々をすごしているのは
何もお隣りさんだけではないはずだ。

ぼくの石原吉郎

—「伝説」のあとに—

福本順次

詩集『足利』（花神社）は発行日が一九七七年十二月一日。奥付のあるそのページには、「十一月十三日、孤独の死。二日後発見さる。」と鉛筆で走り書きがしてある。「十一月二十三日購入」とも書き留めている。いまからちょうど三十六年前のことである。

石原吉郎、一九七七年没、享年六二歳。ぼくはすでにその年齢を二年前に越えてしまった。ついでに言えば、その年は七月七日に二番目の子供が生まれて、七が四つも並ぶことになんとかなく浮かれた年でもあった。それがいまや、身近な人たちの死に否応なく遭遇するような年まわりとなつた。

『足利』には七五年から七七年にかけて発表された四〇篇が収められている。「入水」「相対」「間」など死をめぐる詩も多く、つい惹きよせられてしまう。それらはすぐにもやってくる自身の死を予感したかのように思えてくるのである。例えば

「間」（初出・文藝春秋、一九七七年五月）、

今からが眠りという刻が
なんとしてもわかりません
まして生き死にの間なぞ
他界へ踏み入る爪先なぞ――

のりのきいた襟の片方を
ふたつに折って

婦人はかすかにわらった
姓名をはなれ去る背が
ついにさだかではありません――と

半折を不意に折るように
その夜婦人は成仏した

七〇年の前後、ぼくらの間では本を片手にジャズやクラシックを聴かせる喫茶店で何時間も時を遣り過ごすことが流行していた。走り回り、暴れ回るのはもううんざりという空気が蔓延していた。ぼくが手に持つ本は現代詩文庫の「石原吉郎詩集」だった。ある夜、丸善に勤める五つほど年上の女性と一緒に急な勾配の薄暗い階段を上っていった。隠れ家

に案内するような気分がした。ひとりで過ごすという掟を自ら破ったのだった。

その夜流川のジャズ喫茶シルバーでは、モンブランの万年筆が目前に差し出された。何日か前に、細いの？ 太いの？ と聞かれ、太いのがいい、と答えていた。高嶺の花を目の前にしてぼくは欣喜雀躍した。早速キャップを開け、書き心地を試すようにして即興詩を書いた。「茶色の人」という題名だけは覚えていたが中身はおぼろである。飄々としているながら、物事を深く考える人だった。奥ゆかしくも訥々と発せられることばはこちらの腑の底にきちんと納まる。そんな印象を書き連ねたのにちがいない。ぼくははじめて人に向けて肉声を発した気分だった。その人にしか通じないのはわかっていたが、それでよかった。

二度三度と読んだあとに「認める、認める」と彼女は言った。若いぼくには嬉しい励みだった。万年筆は四十年以上経ったいまも健在なのに、いとおしくて、大好きな人の消息（生き死に）を知る手がかりがいっしょになくなっていく。なんという横着な過去だろう。

翌一九七八年に刊行された遺稿詩集『満月をしも』には「死」という題の詩が収められている。

死はそれほどにも出発である

死はすべての主題の始まりであり
生は私には逆向きにしか始まらない
死を（背後）にするとき
生ははじめて私にはじまる
死を背後にすることによって
私は永遠に生きる
私が生をさかのぼることによって
死ははじめて
生き生きと死になるのだ

〈死をめぐる詩篇〉をいくつか読んだあとに次の「書く」（初出・『ユリイカ現代詩の実験』一九七六年一月）という詩に触れると、もっと近しい記憶にぼくは蹟く。

詩 それは
海からこぼれて
空になるように
空からこぼれて
海になるように
そのように書かなければ
いけないのです

あまりにも理知的だった同世代の女性が自死したという知らせが届いたのは去年の秋だった。かつて長い期間にわたって有形無形の交誼を持った人だったのでへなへなと背骨ごとくずおれた。またいつか逢えると能天気にかまえていた自分が罰を受けているような気がした。

理由を忖度することは詮ないことだが、華麗で毅然とした生きざまを貫き通すような仕舞い方にみえた。

その人にばくはモンブランの万年筆を贈ったことを卒然と思いつくのである。神田の金ペン堂で買い、イニシヤルを入れてもらった。おおきくよろこぶ場面は浮かんでこないが、代わりになぜ万年筆だったのかという問いを突きつけられる。その二十年ほど前、照明を落としたシルバーの片隅での一場面をなぞりたかったのだとすればいいよわがまなふるまいというほかなかった。

しかしいま、肉声にのせて呟きたいことばがある。その人に届けたいことばもある。時空を越える二本のモンブランに思いを馳せると、そんなことばたちがペン先を依り代にして降りてくるのだと信じたい気分になるのだった。

それが「きみは花のような霧が／容赦なくかさなりおちて／ついに一枚の重量となるところからあるき出すことができる／……／日をめぐり／愛称をつたえ／すこやかな諧謔を／銀のようにうちならすとき／あるきつつとおく／きみは伝説である」(「伝説」とシベリアから戻った直後に洋洋と唄った石原吉郎の慇懃であった。

MIDNIGHT NEW YEAR TEA PARTY

date : 2014.1.25 (Sat) 13:00-17:00

(open:12:45)

place : roobik house

<http://roobikhouse.com/access.html>

東京都豊島区東池袋3丁目9-13



★contents

オープニングアクト：古沢健太郎

1. 八木幹夫講演 「詩集『近代の寓話』をめぐって
ーフラヌール、遊歩する人ー」

2. フリートークセッション「今日のポイエーシス（創造）を巡る対話」

○パネリスト：

浅野言朗（建築・詩）、井上智洋（経済学）、今橋大輝（美学）

元山舞（物理学・詩）、八木幹夫（詩、短歌、俳句）&参加者全員

司会：小林レント

3. 朗読会（オープン・マイク）

★参加費：2000円（ドリンク、お菓子付き、持込み大歓迎！）

★定員：30名（予約制）

★予約先：email:mpweb2012@gmail.com

tel:070-5579-1564（中村） 当日ボランティア募集！

A blurry, artistic photograph of a snowy landscape. In the upper right, a small, dark, out-of-focus figure, possibly a person or animal, stands on the snow. The rest of the image is a vast, white, textured expanse of snow with some faint, darker patches and tracks.

midnight winter poem collection

2013 年 冬の詩 17 篇
selected by midnight press

微光 北村太郎

冬の落日を斜めにあびながら、
犬はねむっている、
石段にながながと前肢をのばし、
そのうえに、
老いた顎をのせて。

残酷時代、
おもたい銀の首輪と、
おもたい鎖とが暗い一生の始めに、
きらきらと輝いたのです。
爪でかき乱されたイマージュの連続がわたくしの記憶のすべてです。
二月がおとずれ

三月がやってくる。
(ストーヴに投げこまれ、
赤あかと音をたてて燃えあがる石炭、
しずかに、
主人は歴史の書物をめくり、
屋根をこすってゆく木枯しに火照った顔をあげる――)
四月、

そして五月。
つねに眼を地上にむけて
尿の匂いを追跡しながら街の隅々まで走りまわるのだった。
六月、

そして八月。
そうです、
わたくしは卑屈な芸当をいくつも覚えました、
一片の焼肉がほしいばかりに。
さわやかな秋の水道。
コップにくんだ水がわたくしの牙に霧をかけて獣性をやわらげる。

十一月、
そして十二月。

無限の時のめぐるなかで冬の落日をあびながら、
おとろえた鼻は
ほんやりと一生の終りを嗅ぎつけているのだろうか。



十一月晩く野辺にて

ジエイムズ・ライト
伊藤博明訳

今日 わたしは ひとり はだけた土地を歩いている
冬がやってきているのだ
リスが二匹 柵の柱のそばで
たすけあって 隠れ家のほうへ 一本の枝を
運んでいる 巢は どこか あのトネリコの樹の
陰にあるのだろう
かれらはまだ活発に動き回っている 寒さに備えて ドングリを
蓄えねばならないのだ
月が顔を背けると トウモロコシの 茎の間の窪みを
華奢な獣の 手がさぐる

地面は もう固い
靴の底を直さなければ
わたしには 祝福をのぞむものはない
この 言葉以外には
これが 草であれば
いい

雪球

スノウボール
津村信夫

雪を踏むと私の目がひらいた、私の瞳孔にうつる雪は蒼かったね。そこはかとない日光^{ひかり}。屋根瓦の上に溪流があつた。私は雪を手づかみにして建物の蔭^{かげ}に投げた。飛び散つて行くものを、溶け散つて行くものを、私の今日の日の願望。

庭の泥濘^{ぬかるみ}は僅かに白い塊を残して、其の上を黒猫がとんだ。細い留針のさきが光つた。それを把へようとして私は空気のあの震ひを知つた。



蒼ざめた馬

萩原朔太郎

冬の曇天の 凍りついた天気の下で
そんなに憂鬱な自然の中で
だまつて道ばたの草を食つて
みじめな しよんぼりした 宿命の 因果の 蒼ざめた馬の影です
わたしは影の方へうごいて行き
馬の影はわたしを眺めてゐるやうす。

ああはやく動いてそこを去れ
わたしの生涯^{らいふ}の映画幕^{すくりん}から
すぐに すぐに外^ずりさつてこんな幻像を消してしまへ
私の「意志」を信じたいのだ。馬よ！
因果の 宿命の 定法の みじめなる
絶望の凍りついた風景の乾板から
蒼ざめた影を逃走しろ。

冬が来る

ジュウル・ラフォルグ

吉田健一訳

感情の封鎖、東風の襲来。……
あゝ、雨が降り、日が暮れて、
風が吹いてゐる。……
聖霊祭、降誕祭、お正月、
あゝ、煙突は雨の中に霞み、……
それも、工場の煙突だ。

公園のベンチは濡れてゐて、もう腰掛けることが出来ない。
もう来年まで何もかもおしまひで、
ベンチは濡れてゐるし、木の葉の色は変り、
角笛はもう吹けるだけ吹かれてゐるのだ。……

英国海峡の方から吹き寄せられた雲が
私達の最後の日曜日を台なしにしてしまった。
雨が降つてゐる。

森は濡れて、蜘蛛の巣が

滴で重くなつて破れて行く。

田舎の景色を金色に染める

麦畑の実りを守護した太陽は

どこに行つたのか。

今日は夕日が弱り切つて丘の上に

えにしだの花の中に外套を敷いて横たはり、

それは酒場の床に吐いた唾に似て白い太陽で、

えにしだの黄色い花の床に、

秋の黄色いえにしだの花の床に寝転がり、

角笛の音が響き渡つてゐるのも甲斐がない。

太陽が、……

太陽が元氣を取り戻しますやうに

と角笛の音は言つてゐる。

その悲しい繰り言はもう止めてくれないか。……

聞いてゐると頭が変になりさうだ。……

そして太陽は、頸から取つたるいれきのやうにそこは横たはり、

一人で震へてゐる。……

かうなれば、もうおしまひだ。

誰もがよく知つてゐる冬が来るのだ。

あゝ、街角の曲り角よ、

そしてそこに赤頭巾は歩いてゐない。……

先月通つた車の跡は

健気な二本の線になつて、

無慈悲な風に追はれて大西洋の方に
算を乱して走り去る雲の群に向つて登つて行く。……

急がう、急がう。今度こそは冬が来た。

そして風は昨晚、ひどい荒れ方をして

小鳥の巣も、小さな家の庭も、目も当てられない有様だ。

私の胸には一晩中、木を倒す斧の音が響いてゐた。……

木の小枝はこの間までまだ皆青い葉を着けてゐたのに、

森の木の下に今は枯葉が積つてゐる。

小さな木の葉よ、風が君達の長い列を

池の方に運んで行くやうに。

或は、猟番が焚き火をする時の材料に、

或は、フランスを遠く離れてゐる兵隊達が

病院で使ふ枕に詰めるのに、風が君達を吹き寄せてくれるやうに。

冬が来て、銹が群衆を包み、

誰も通らない街道の

何百キロも続く電線の悲みにも銹が食ひ入る。

角笛の音のもの悲しい響が、……

もの悲しい響が、……

別な調子に変つて、

今まで聞いたことがない

音楽になる。……

角笛の音は、……

北風に吹き消されてしまった。

私は角笛の音を忘れることが出来ない。何と多くの思ひ出がその音に

籠つてゐることか。……

冬が来て、取り入れは終つた。……

天使の忍従振りで降り続ける雨の季節になつて、

取り入れも、取り入れの籠も、

栗の木蔭で皆が踊つてゐるワットオ風の催しももうどこにもない。

学期が始つて戻つて来た生徒達の寄宿舎で誰かが咳をするのが聞え、一人住ひをしてゐるものが薬湯を飲み、肺病が一区の方々に拡つて行つて、大都会をみじめにするものが凡て始る。

併し毛糸の下着にゴムの上靴、薬局、夢、町の屋根の海に向つてゐる

露台の窓から引いたカーテン、

ランプの光、版画、紅茶、紅茶に合ふ菓子、

かういふものだけを愛して行く訳には行かないのだらうか。……

(それから、どこからか聞えて来るピアノの音の他に、新聞に毎週出てゐる

衛生関係の統計の

夕暮に相応しい、嚴肅に神秘的な味を君は知つてゐるだらうか。)

いや、いや。この季節には地球までがどうかしてゐる。

東南からの氣違ひ染みた風が、

「時」が毛糸で編んだ上穿きを解きほごしてしまふやうに

冬が、我々の胸を搔きむしる冬が来たのだ。

私は毎年、その度に、

この冬の響を伝えることにしたい。



冬の長門峡 中原中也

長門峡に、水は流れてありにけり。
寒い寒い日なりき。

われは料亭にありぬ。
酒酌^くみてありぬ。

われのほか別に、
客とてもなかりけり。

水は、恰^{あた}も魂あるものの如く、
流れ流れてありにけり。

やがても蜜柑^{みかん}の如き夕陽、
欄干^{らんかん}にこぼれたり。

あゝ！——そのやうな時もありき、
寒い寒い 日なりき。

冬の言葉 高村光太郎

冬が又来て天と地とを清楚にする。
冬が洗い出すのは万物の木地。

天はやつぱり高く遠く
樹木は思ひきつて潔^{きよ}らかだ。

虫は生殖を終へて平気で死に、
霜がおりれば草が枯れる。

この世の少しばかりの擬勢とおめかしとを
冬はいきなり蹂躪する。

冬は凧の喇叭を吹いて宣言する、
人間手製の価値をすてよと。

君等のいちらしい誇をすてよ、
君等が唯君等たる仕事に猛進せよと。

冬が又来て天と地とを清楚にする。
冬が求めるのは万物の木地。

冬は鉄礎を打つて又叫ぶ、
一生を棒にふつて人生に閑与せよと。



くらかけの雪 宮沢賢治

たよりになるのは
くらかけつづきの雪ばかり
野はらはやしも
ぼしやぼしやしたり黝んだりして
すこしもあてにならないので
ほんたうにそんな酵母のふうの
朧ろなふぶきですけれども
ほのかなのぞみを送るのは
くらかけ山の雪ばかり
(ひとつの古風な信仰です)

冬の日 西脇順三郎

或る荒れはてた季節
果てしない心の地平を
さまよい歩いて
さんざしの生垣をめぐらす村へ
迷いこんだ
乞食が犬を煮る焚火から
紫の雲がたなびいている
夏の終りに薔薇の歌を歌った
男が心の破滅を歎いている
実をとるひよどりは語らない
この村でラムプをつけて勉強するのだ。
「ミルトンのように勉強するんだ」と

大学総長らしい天使がささやく。
だが梨のような花が藪に咲く頃まで
獺人や釣人と将棋をさしてしまつた。
すべてを失つた今宵こそ
ささげたい
生垣をめぐり蝶と戯れる人のため
迷つて来る魚狗と人間のため
はてしない女のため
この冬の日のために
高樓のような柄の長いコップに
さんざしの実と涙を入れて。

本郷肴町 石原吉郎

おれが好きだというだけの町で
おれが好きだという数だけ
熱にうるんだ灯がともつても
風に あてどは
もうないのだ
おれが好きだというだけでは
低い家並は道へはせり出さぬ
おれが好きだというだけでは
人の出入りへ木洩れ日も落ちぬ
おれが好きだというだけでは
片側かげりの電車も走れまい
本郷肴町
屋根や柱や敷居の分際が
甲斐性ばかりでささえた羽目板を
ひとつの町の

生涯へ踏み鳴らす
母音ばかりの口論の果ては
腕が性根を据えただけだ
するめのようなこわい掌を振って
陸奥のおとこが立去って行くむこう
本郷肴町に
雪は降っているか



チューリップ シルヴィア・プラス

中村剛彦訳

チューリップがとても恐い。今日、この冬の日。
ほらすべてがどんなに白く、どんなに静かで、どんなに雪の中のようなか。
私は一人静かに寝そべりながら、静寂と和解してゆく。
この白い壁、このベッド、この二つの手が光に照らされるにつれて。
私は誰でもない。もう感情がない。
私は私の名前と洋服を看護婦たちにくれてしまった。
私は歴史を麻醉手にくれてしまった。私の肉体を外科医にくれてしまった。
彼らははいねいに、枕とシーツの間に挟まる私の頭を抱く。
白い瞼の間でじっと開く一つの眼に触れるように。

愚かな瞳孔よ、すべてを見つめなければならない。
看護婦たちはそそくさと横切り、何もなさげに、
まるで鷗の群が陸を飛ぶよう。あの白い帽子。
そして働いているその手は、全く同じ動作をしている。
何人いるか分からない。

私の体は瑪瑙。彼女らは私に触れる。まるで水が瑪瑙に触れ
優しく滑らかな形にして過ぎ去るように。

彼女らは鋭い針の先で私の感覚を奪い、眠りに導く。

私は私を失った。ただそこらの荷物に吐き気がするだけ。

黒い葉箱のような特製の皮の夜具ケース、

夫と子どもが笑っている家族の写真。

しかし彼らの笑みは私の皮膚を開放する小さく微笑む鍵。

私はあらゆることを海に流してきた三十歳の貨物ボート。

名前と住所だけがいつまでも離れないけど、

私が愛するすべてのものは洗い落とされた。

ただ緑色したプラスチックのベッドの上で退屈し脅えながら

私の紅茶セット、リネンのブラウス、本が

視界から沈んで消えてゆき、そして水が私の頭を超えて流れていくの
を見た。

いま私は無。こんなに純粹になったことは初めて。

もうどんな花も欲しくない、ただ一つ、

手を翻して寝そべり、完全に空っぽになりたい。

なんて自由な、はるかに、なんて自由な……

静寂は非常に巨大、あなたの幻惑の中へ導く。

静寂は何も求めない。名札も、僅かな飾り物も。

死がとうとう近づいている。みんなが口を閉ざして私の屍を
じっと見ている様を想像する。まるで聖餐式の石碑を見ているように。

チューリップの赤い色が私を切りつける。

見舞の包み紙の向こうでチューリップが息をしているのが聞こえる。

はつきりと、その覆い布を通して、まるで恐ろしい赤ん坊のように。
その赤い色は私の傷に話し掛ける。それは一つ。
薄く、浮いているようだ。しかし体の上に重く押し掛かり、
突然深紅の舌で私を狂わせる。
飛び出す赤が私の首に重りを巻く。

かつては誰も私を見なかったが、今、私は見られている。

チューリップは私の方に振り返り、背後の窓の光線は

一日に一回ゆつくりと広がりゆつくりと狭まり、

太陽とチューリップが交わす視線の間で私は、

自分が平らな、愚かな、薄っぺらの影絵のように見え、

私には顔がない。ただじっと身を隠していたかった。

生々しいチューリップが私の酸素を食べる。

チューリップが来る前は空気はとても穏やかで

騒ぐことなどなく、さらさらと流れては去っていただけ。

でも叫び声が部屋を満たした。

今は空気があの回りで荒れて渦巻く。まるで川の水が

ぼろぼろの錆びた赤いエンジンの回りで渦巻いているように。

全神経がびりびりと反応する。それさえなければ、

ただ遊んだり休んだりして楽なのに。

壁もどんどん熱を帯びていく。

チューリップが猛獣のように手摺の背後にいる。

なにか巨大なアフリカ猫の口のように大きく花卉を開いている。

私は知っている。開いたり閉じたりする、

あの赤い色の球体は私の透明な愛からあふれ咲いているのだ。

舌に滲む水は生ぬるく塩っぱい。まるで海水のよう。

幸福からは限りなく遠い国から流れて来る。

風のなかの井戸掘りたち

パウル・ツェラン
飯吉光夫訳

誰かがヴィオラを弾いているだろう、日ざしの下方へむけて、甕のなかで、
誰かが「満足」という言葉のなかで逆立ちしているだろう、
誰かが戸口で首吊られて足を十字にしているだろう、そのかたわらには昼顔が……。

今年は
ざわめき過ぎて行かない。
十二月を突き返す、十一月を、
傷また傷を掘りかえす。
今年はみずからをおまえにあばいてみせる 墓掘り人たちの
みずみずしい
井戸よ、
十二の口よ。



白鳥 吉田一穂

1
掌に消える北斗の印。
……然れども開かねばならない、この内部の花は。
背後で漏沙すなごけいが零れる。

2
燈ラムプを点ける、竟には己れへ還るしかない孤独に。
野鴨みなかみが渡る。
水上は未だ凍つてゐた。

3
薪を割る。
雑草の村落むらは眠つてゐる。
砂州デルタが拡はらきく形成されつゝあつた。

4
石臼の下うすの蟋蟀。
約翰伝第二章・一粒の干葡萄。
落日。

5

耕地は歩いて測つた、古の種を握つて。
野の花、花、謡ふ童女は孤り。

6

蘆の史前……
水鳥の卵を手に莞爾、萱疵なめながら、諏佐之男のこの童子。
産土で剣を鍛つ。

7

碧落を湛へて地下の清冽と噴きつらなる一滴の湖。
湖心に鉤を投げる。
白鳥は来るであらう、火環鳥弧の古の道を。

8

白い円の仮説。
硝子の子午線。
四次元落体。

9

波が喚いてゐる。
無始の汀線に鴉の間がつく。
砂の浸蝕……

10

無燈の船が入港る、北十字を捜りながら。
磁極三〇度斜角の新しい座標系に、古代緑地の巨象が現れてくる。
紛したサンタ・マリヤ号の古い設計図。

11

未知から白鳥は来る。
日月や星が波くぐる真珠海市
何処へ、我れてふ自明の眩暈……

12

時の鐘が蒼白い大気を顫はせる。
誰れも彼も還らない……
屋上に鳥の巣が壊れかゝつてゐる。

13

灯を消す、燐を放つて夢のみが己れを支へる。
枯蘆が騒めてゐる。
もう冬の星座がきてゐた。

14

ユークリッド星座。
同心円をめぐる人・獣・神の、我れの垂直に、水蝕輪廻が軋んでゆく。

終夜、漂石が崩れる。

15

地に砂鉄あり、不断の泉湧く。
また白鳥は発つ！
雲は騰り、塩こり成る、さわけ山河。



冬の王 福永武彦

星ひびく夜の流れを過ぎて
幾冬を 天の浮囚に別れ
地に 痛みにつもる雪はなだれ
空にいつ あかつきの金の射手
ただ氷と銀と死の思ひ出
ひびれ落つ日によどむ悪の幸

不壊の鎖をめぐる蛇を断ち
日輪のにぶく熟れる時まで

我は歌ふ 白鳥の白より
沈む無限の冬を 凍る薔薇
囚はれの時の秘鑰をまもり
遠点の生のきはみの孤独
わが屍を焚く火のかたはら
不死の蝶は眠る つばさ重く



ピアノ D・H・ロレンス 関口篤訳

うっとりとして 夕暮に 女の人が私に歌を歌ってくれる
過ぎた日の思い出に私をつれ戻す やがて私には見えてくる
弦の響きの中でピアノの下に坐った子供が
歌いながらほほえむ母親の 小さな形のよい足にもたれているのが

心覚えの歌が いつの間にか私を
幼い日に誘いこむ 私の心は過ぎ去った日曜の夕暮の
わが家を憶つてなきじゃくる 外は冬
心地よい居間 ピアノに合わせて歌われる讃美歌

だから今は 大きな黒いピアノのアパシヨナータにあわせて
歌う人が声をはりあげても 虚しいことだ
子供の日の魔力に魅入られて 大人の私は思い出の洪水に溺れ
過ぎた日のために 子供のように泣いている

眠りの誘ひ いざな 立原道造

おやすみ やさしい顔した娘たち
おやすみ やはらかな黒い髪を編んで
おまへの枕もとに胡桃色にともされた燭台のまはりには
快活な何かが宿つてゐる（世界中はさらさらと粉の雪）

私はいつまでもうたつてゐてあげよう
私はくらい窓の外に さうして窓のうちに
それから 眠りのうちに おまへの夢のおくに
それから くりかへしくりかへして うたつてゐてあげよう

ともし火のやうに
風のやうに 星のやうに
私の声はひとふしにあらこちらと……

するとおまへらは 林檎の白い花が咲き
ちひさい緑の実を結び それが快い速さで赤く熟れるのを
短い間に 眠りながら 見たりするだらう

生の半ば フリードリヒ・ヘルダーリン

吹田順助訳

黄色なす梨の実
枝もたわわに、野薔薇水に映らふ
湖の岸べに立てば、
らうたき白鳥よ、汝達^{なれたち}は
けうとしや、接吻^{くちづけ}に酔ひしれつ、
頭^{かうべ}をひたに浸すらし、
浄らにも冷たき水の中に。

悲しからずや、冬としなれば、
われはいづこに花を摘まし、
いづこに日の光を、
地上の影を求めえむ。
障壁^{へき}は言葉なく、冷かに連なりて、
風吹くなべに風見^{かざみ}ぞきしめく。



詩情と空間〈7〉

浅野言朗

19・地名について

建築の設計の仕事を行っていると、建物を造る時に提出しなくてはならない確認申請書において、その敷地の所在地を示す二つの記述が併用されていることが分かる。一般的な住所としての〈住居表示〉のほかに、土地の履歴に即した〈地名地番〉と言われているものである。敷地によつては、建物を計画している時点で〈住居表示〉が確定しておらず、〈地名地番〉しか与えられていない敷地もあるが、この二つの記述方法はそもそも由来が異なっており、実際に少なからず齟齬がある。

住居表示では、概ね近代的に整理されたシステムにおいて、大枠としての地名で広範囲を覆った上で、その下の○丁目○番地という表記によつて、番号の階層性の中で特定の地点を指示しようとしている。けれども、登記簿に記載されている地名地番であれば、大字名の下にさらに字名が書かれていることもあり、その字名の指示する範囲が小規模であるために実際に少し歩いただけでも新

しい地名の領分に入っていることもある。これらは市販の地図では見ることが出来ず一般的に使われていない隠された地名であることも多く、未整理ながら詩的情感に溢れていて、その発見はとても楽しい。

都市部であるか否か等によつても事情は異なるが、いずれも、使われることが少なくなつた多彩な地名が眠つていることが分かる。地名が時代と共に変遷することがあるのは当然としても、新しい地名の系列が古い地名の系列に完全に置き換わる、というよりも、その上に重ねられて古い地名がそれなりに残存して顔を覗かせている、ということだろう。地名の由来は当然様々であり、場所によつても異なつたルールがあるだろう。里山では、谷に添つて集落が点在するから、空間の単位と集落の単位が同一であり、従つて、地名（集落名）はある程度重なり合うだろう。江戸↓東京のように様々な時代に様々な人が訪れて棲み付いた都市であれば、それぞれの地名の由来も複雑であり、時期の異なつた地名の階

層が重なりあっている。また、京都のような条坊制に基づく整然とした街区が通りに面している場合は、道を単位とした特徴的な地名の系統が出来上がっているだろう。

地名の名付け手ということでは、その住民が誰ともなく命名したかも知れないし、政府や行政によつて整理されたもの、あるいは鉄道の敷設に伴うデベロッパーによるものもあるだろう。現在使われている地名の背後に眠っている、整理抹殺されつつある多くの地名を辿ることによつて、言葉と場所、ひいては、詩情と空間の豊かな呼応関係が、特定の言語活動の担い手のみによつて支えられているのではなく、より広範な意識の広がりによつて支えられていることを、想像・確認することができる。そこにその地名があるということとは、その由来が何であれ、そこがそう名付けられなければならない必然性と、それを使いこなしていた人たちが存在していたと言えるだろう。

さらに、日本人の姓の多彩さはよく知られたところであるが、人の名前（姓や呼び名）と地名には相関関係がある、と言える。ある人物を呼称する時に、その人に由来する／住んでいる地名・場所が投影されていることも多いだろう。皇族の宮家の命名はそれぞれの所縁の場所と関わっている例も多い。そもそも〈皇室〉〈宮家〉〈東宮〉というような名付け

方自体が、場所と人物との呼称の同一視を示している。個人的な例では、幼い頃、父方・母方の祖父母を、姓ではなくてそれぞれの居住地で呼び分けていた。

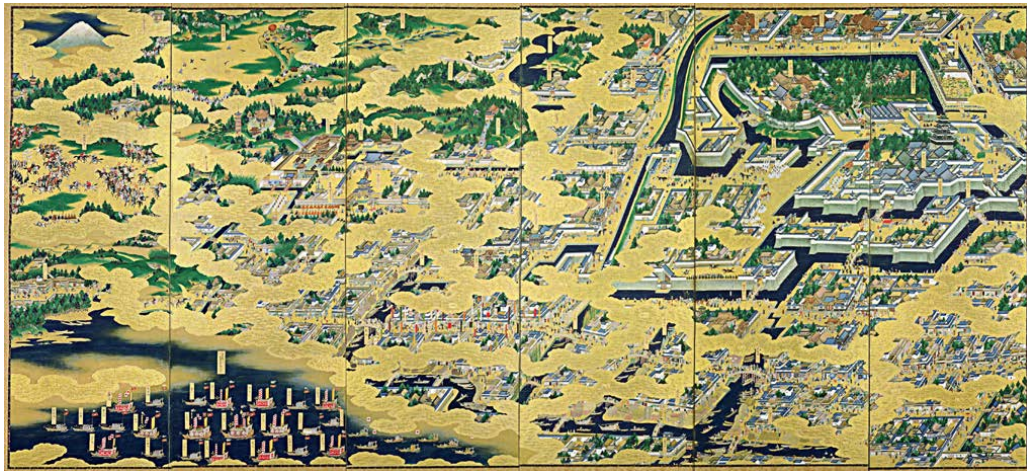
身体的に感受される空間的概念は地名として言語化されて、それが人名の形で人格の中に入り込んで来る。そして、人間の移動とともに地名もまた移動して、遠く離れた場所に移植されることもあるだろう。空間的な特性が言語化されていく、さらに言語化された空間性が、現実的な空間のスケールとは切り離された系列に移し替えられて編集されていく、ということになる。

差し当たつての関心は、そういった地形の中に棲息すること＝空間感覚が、いかに言語感覚を刺激して地名に転写されたのか？ さらには、それがどう喪失あるいは置換されていくのだろうか？ また、詩において空間性はどう表現されているだろうか？ といったことにある。

20・江戸↓東京について

最近、東京における地形と歴史の関係を考察した書籍がブームになつていて、立て続けに幾つかの本が出版されている。皆川典久著『凹凸を楽しむ 東京「スリパチ」地形散歩』（洋泉社二〇一二年）や竹内正浩著『地図と愉しむ東京歴史散歩 地形篇』（中公新書二〇一三年）などである。世界的に見ても、江戸↓東京

と時間的に永続し空間的にも大規模な都市が、その中に微地形を大量に包含し、細かい空間に分節されている例はそう多くはない。特に東京では、入り江（湾）のもっとも奥深くに江戸城↓皇居を構え、その西側の丘陵と東側の平地とに跨がって都市が発達している。そして、その丘陵



初期江戸屏風図（十七世紀）

から平地へと移り行く領域には、無数の小さな谷が切り込んでおり、その小さな谷の起伏が、江戸↓東京の（ひいては日本の各地の）空間スケールの重要な単位となつて、我々に染み付いている、と言える。生活圏と重なり合う手頃な大きさの（谷間）や（坂）は、我々の身体感覚そのものである。

しかしながら、都市化が進むとそれらの地形は意識化されづらいものとなり、地図を見ながら、道路や鉄道、街並といった人為的な産物と、その下にある地形との関わりを、即座に把握することは難しい。であればこそ、こういった書籍を読む面白さがある。頻繁にあげられる例として、そもそも地下鉄である銀座線であるのに渋谷に至って地上高く掲げられた陸橋の上を通っている、といったことに東京に豊かに潜在している地形を感得させられる、ということになる。

一九八〇年代にも東京における都市の歴史の考察が、とりわけ建築的な文脈で、集中的になされた。横文彦他著『見えがくれする都市』（一九八〇）、陣内秀信著『東京の空間人類学』（一九八五）、鈴木博之著『東京の地霊』（一九九〇）、といった文献が近い時期に出版されている。それは、都市の全体的な歴史ではなくて、都市がそれぞれの部分において固有に持っている歴史を、身体的・日常的な局面で我々がどう感得する

ことができるかを考察している。文学の領域では、建築的な文脈で頻繁に参照される奥野健男の『文学における原風景 原っぱ・洞窟の幻想』は一九七二年に著されている。それは、東京が国際都市の一つとして世界のどこにでもあるような建物に埋め尽くされて行く時代にあつて、都市の固有性を確認する作業であつたとも思われる。

先ほども触れたように、その成り立ち上、東京は複雑な微地形を多く抱え込んでいる。既存の小さな谷、運河によって分節された平地、小刻みに伸長して行く埋立地……というように小規模な空間の単位を密集させて束ねたような東京には、今日まで残っている一つ一つ名付けられた坂、古地図の中にある街区ごとにつけられた町名のように、地図の背後には高密度に地名が眠っている。郊外の事例では、一般的に日本の集落は谷沿いに広がることが多いが、谷の支流の単位が集落の単位となるので、小さな谷の一つ一つにいたるまで異なつた名前が付される、ということになる。

先人は、今よりもはるかに繊細に（場所）を（地形）との兼ね合いの中で捉え、微小な差異に至るまで細かく感知し、峻別して認識していた。そのことを多くの地名が教えてくれる。人間の身体的な移動可能範囲／微小な生活圏域／身体空間の延長こそが、一まとまりの空間として認識

されるのであり、その単位空間ごとに名付けが行われていた。

（参考文献：横文彦他著『SD選書』見えがくれする都市 鹿島出版会一九八〇、陣内秀信著『東京の空間人類学』ちくま学芸文庫一九九二、横文彦著『記憶の形象 上』ちくま学芸文庫一九九七）

21…空間性の詩的側面

ところで、詩の中に場所性や空間性はどのように、刻印されているだろうか？ 例えば、島崎藤村『夏草』（一八九八）や『落梅集』（一九〇二）の中には、具体的な地名が多く出て来る。具体的な地名との関連において詩的世界が展開される例は、少なくない。

一方、例えば谷川俊太郎『62のソネット』（一九五三）には、具体的な地名は出て来ない。出て来るのは、〈宇宙〉〈世界〉〈地球〉〈空〉といった空間的にも概念的にも大き過ぎてその全容が到底掴めないものであり、〈室〉〈窓〉〈椅子〉といった誰の身近にもあつて反つてその一つ一つに固有性のないものである。概ね具体



島崎藤村

的な地名への言及は避けられ、抽象化された場所が好んで使われており、そのことによって連作の空間性が注意深く編まれて行く。これは、現代詩における一般的な方向性とも言えるだろう。

具体的な地名の使用の有無自体が問題ではなく、それぞれの詩的世界が場所性や空間性をどう備えているか、を考えなくてはならない。そもそもある具体的な場所を名付ける、ということとは、それ自体が詩的な営みであるだろう。〈詩〉とは、空間的な枠組みをその都度構築し直して定義付けることであると思われる。

従って、具体的な地名を付すことは、逆説的に、その場所を新たな空間の関係の中に抽象化して送り込んで行く、ということではないだろうか？

一度は抽象化された名前に対して、時間の経過は具体的な出来事や意味付けを堆積させていく。すると、一旦構築された名前の系列を脱皮する必要が出て来る。〈詩情〉の一つの機能は、具体性にまみれた〈場所〉や〈出来事〉から、その具体性を除去して抽象化していく、ということにあるだろう。しかしながら、一見、ある場所を名付けることがその場所の〈具体性〉に寄り添うことであり、反対に、具体的な地名を排除することがその抽象性を高めることであるように思われるが、実際には、ある場所を名付けるということは、その

場所を個別的で具体的なものにするのと同時に、その場所を抽象化していくものでもある。

具体性と抽象性は、相反する概念ではなく、抽象化の極点がいづつの間にか具体性に至っている（かつ具体化の極点がいづつの間にか抽象性に至っている）というように、メビウスの環のような構造を持っている、と考えられる。

（参考文献：島崎藤村著『藤村詩集』新潮文庫一九六八、谷川俊太郎著『62のソネット＋36』集英社文庫二〇〇九）



そよ風 #6 硬直した精神

『entax』40号は、坪内祐三による石原慎太郎へのインタビュ「東京五輪決定に思うこと」が出色。自らが牽引役の一人でありながら、東京五輪開催決定に対してどことなく冷めている石原の語り口にも興味をそえられるが、何と

いっても大久保房男や吉行淳之介らとの対立といった、文人としての自らについて語った部分が面白い。特に近年、石原が「すばる」に小説の原稿を持ち込んだ際、「差別論者」の原稿は掲載しないと女性編集長に断られたというエピソードは、既にあちこちで話題となっている。石原自身「面白い」だの「勇氣ある女」だのと皮肉まじりに煽っているが、生身の作者と作品はとりあえず切り離して扱う、という昨今の〈常識〉から考へるといささか奇異な話ではある。作品は作者を超えた包容力を、時に示しうるものだ。もちろん、このような〈常識〉に対して、硬直した態度とすれすれの叛旗をひるがえす自由が編集者に許されぬという法もあるまい。が、石原のコメントの通りの経緯を辿ったのだとすれば、あまりに粗い手口であることは否めないであろう。

さて、この石原のインタビュー、「オリンピックが来る気持ち」と題された特集の一部のだが、作家や批評家などを対象にオリンピックへの賛否を問うアンケートが同時に掲載されている。詩人では小池昌代が否定的な立場から回答を寄せているのだが、その理由として「放射能汚染」を挙げている。「東日

本の子どもたちや動植物・魚等、生態系に今後起こる変化。莫大なエネルギー消費。東京は不夜城ではなく震災直後のように暗くしてほしいです（いい感じだった）。何もかもがなかったかのように元に戻ってしまう東京の貧しさ。」紙幅の都合もあったのかもしれないが、認識の粗さを感じざるを得ないコメントだ。二〇一一年当時ならまだしも、二年以上が既に経過し、「放射能」とのつきあい方の形は刻々と変化しつつある。つまり「放射能」に対して抱く不安の形も一緒に変化している。しかしながら、小池のこれらの言葉はその変化の微妙さ——またそれゆえの「放射能」への対応の難しさ——を視野に収めているとは言い難い。ここに顕わなのは、原発事故の直後の漠然とした破局のイメージの中に安住したままの、硬直した精神構造だ。この後に続く「エネルギー消費」や「東京」そのものに対する批判も凡庸極まりない。（いい感じだった）の一言を添える程度で、政治的な正しさとは別次元の批判精神を——アリのバイ的に——読み手に差し出せたつもりになっているのだろうか。無論、これは小池ひとりだけが抱えている問題ではないのだが。

作者本位で作品掲載の可否を判断する編集者、不安の細やかな変容に向き合えぬ書き手。いずれにも共通しているのは政治的なポジションについても、あるいは震災後の「東京」のありようについても、単一的に〈正しい〉答えがあることを意識的にか無意識的にか、行動原理としてしまっている点だ。単一的な〈正しさ〉ほど文学と相性の悪いものはなからう。

（軟弱者）

詩の教室

第二講 「欠落した過去のほうから」

小林レント

みなさま、ご投稿ありがとうございます。安直に総括などできない多様さ、言葉への取り組みの固有の形に、今回も触れることができました。特徴的だったのは、現代や話者の現在時に対して、批判的な視線を向けている作が多かったことです。批判といっても、声を荒らげて具体物を糾弾するのではなく、それぞれの詩の形式のなかで、相手の正体をみきわめる。漠然と流してしまいうようになる欠落感の、輪郭を際立たせる。わたしたちの周りには事物も観念も書物もコミュニケーションもあふれかえっています、この「ある」の過剰のなかで、あえて「ない」もののほうから「ある」の違和感を逆照射する詩の営為を感じています。一方で、それは困難な営みでもあります。なにしろ「ない」ものには名前がないし、それがかつてあったとしても、忘却にさらされつつあるのですから。

すこし気になった傾向は、散文的に言いたいことが先走りすぎて、言葉同士の響きあいやイメージの関係が、充分に機能していない作が見られることです。あるコンテキストや日常生活のなかでは、それで伝達しうるのかもしれないのですが、詩の空間は基本的に閉じています。「一本のろうそく」という言葉は、詩の内部空間を照らします。「唇」がそととそれを吹き消せば、白い煙がしばらく人の気配のする闇のなかを漂います。もちろん詩の外部の寒風に、その灯火を消すこ

とはできません。だからこそ内部の言葉は、孤独のうちで己のイメージや意味連関（その瓦解も含めて）を育まなければなりません。言葉たちが、作者の手を離れ、独力でなにを語ろうとしているのか、注意深く見守ってください。

立体感の欠如 麻生有里

ソリティア

確かそういう題名のついた小説だったか映画だったかジャズだったような気もするがそれは割とどうでもよくて繰り返し 白紙の上に描く

レンガ造りの
葡萄色の建物の 形だけを

この時代だから
見たくないものを避けるのは
あまりにも簡単

選別すれば

必然の有無にかかわらず
耳からぼろぼろ落としていくことも
そのかけらを さらによりすぐって
一番聞きたくないCDを作ること

細部に至るには

乱視を治さなくては
癒せば不愉快なこともあって
事実上の マンホールの蓋

棚の上には埃が描いてある
埃は時々 咳で吹き飛ばされる
夜中に むずかるのは大抵
いい歳の髭面
物語の終わりが近づくと

歯を見せて笑い始める 淑女
よくない返事をしてあげよう
そう 彼らにとつての

記憶が破裂した時のことを
覚えてるか 覚えてるか
こうやって悼んでいれば

全ての死者が死者として生きられるのか

聞きたくないCDを作ってみた
聞きたい音源は溢れているから
新しい文字を作ってみた

多くの文字には指紋が付着しているから
ソリティア 毎日そうやって
自分を持て余しながら
それでも何かがない

足りないのではなく ないのだ

S字に曲がつた道を
できるだけまっすぐに歩こう
部屋を一步出れば

そこはマンホールの蓋だ

行き交う 輪を書く 三角形の角に躓く
そしてようやっとで
彼らが 死者ではなかったことを
しばらくぶりに 思い出す

○麻生有里さんの『立体感の欠如』の

リズムには独特なものがありません。欠如の感覚への苛立ちは、この詩の足早な進行の燃料になっているのですが、感覚そのものに惑溺してしまうことはありません。

ん。「ソリティア」という、孤独や一人遊びを思わせる響きの怜悧さが持続します。話者のこの口ぶりは、他者からの一義的な解釈を拒絶します。たとえば、意味的にのみ読み進めてゆくと、「事実上」という強力な言葉を付された「マンホールの蓋」や、「髭面」「淑女」で行き止まってしまう。ゲームのルールがわからなくなつて、盤面のイメージだけが残像します。意味の世界を構築する散文的思考は、詩の謎のまえてたじろぎます。安寧を求めらば、それこそ「耳からぼろぼろ落として」しまいたくなる。

しかし共通のルール（円滑なコミュニケーションのための）にしたがつて語り合うことの中絶は、詩特有の力です。意味がイメージにゆずりわたされるとき、読者はそれを自己自身の内部に与えられたイメージとして、自分なりに感受せねばなりません。現在のわたしは「マンホールの蓋」から、沈黙、重たさなどの感性的印象とともに、墓穴と大きな生死の流れの隠蔽のニュアンスを嗅ぎます。そしてそれに賭けて書かざるをえません。口語自由詩のルールは、その詩固有のもの、一度かぎりのもので、しばしば、わたしたちの通例のコミュニケーションを逸脱します。この詩に惹かれたのは、まず、その孤独を安直に解消してしまわないだけの内的なリズム、一人遊びの徹底を感じたからでした。各連のあいだの結合は不明瞭なのに、第五連の不意打ちのような告発にも違和感がない。それは言語によって惹起される情調のリズム（この詩の通奏低音はそれです）に、読み手のわたしも飲まれているからかもしれません。

「繰り返し」白紙の上に描く／レンガ造りの／葡萄酒色の建物の「形だけを」という部分は、「この時代」の性質とどこか似たものを感じます。「見たくないもの」、不快な「細部」を捨象しても、充分に生きてゆける気がする。しかし「レンガ作りの／葡萄酒色」のざらついた質感はそこにはない。その質を欠いた形は、繰り返し白紙にリセットされてしまう。この不毛さは、「記憶」の「破裂」によるのかも知れない。すなわち、現代の生者がもつとも見ないですませたい「死者」の忘却に。「今日の人間は、ある日突然に、自分たちだけが地上に残っていること、死者は冗談で死んだのではなく、ほんとうに死んでしまったのであり、もはやわれわれを助けてくれるわけにはゆかぬことを悟るのである」(『大衆の反逆』オルテガ)という言葉を想起していました。

人類史上最高の快適さのなかで、過去に鑑みる必要自体が存在しないかに見える。ただそれは、生者に比して圧倒的多数者である死者の経験を捨象し、手を切り、孤立無援になることでもあります。切り捨てられる不快なものを「聞きたくないCD」として編集し、ひるがえって「新しい文字」(もちろん現在を生きる誰にも通じない文字)を作る無為な遊びを介して、話者は彼らとの連続性があるもはや「ない」ということに気づきます。死者を生者の生活の不足分を補うべく復活させるのではなしに。生者の孤独な歩みに指針はなく、いまや道のほうが「S字」に曲がってしまったこと、正しさの基準が外在的には与えられないことを認めなければならぬ。そこで、できるかぎりのまっすぐを指す生者の初動的な身

振りが、反復の輪のなかで挫折するとき、ようやくかつて生者であったものと、未来の死者の同形性が想起されるのかもしれない。

最終連、すぐれて音楽的な終止感の演出に傾きすぎて、言葉がイメージや意味を十全に發揮できていない感もあります。全体的に、ベースラインとしての音やその切断のリズムと、イメージや意味の展開のリズムとをもうすこし意識的に連動させられたら、麻生さんの鋭さはさらに活きてくると思います。

偽書による自画像 小松正二郎

天使ラザエルの聖なる書物
シナイ山上聖カタリ派修道院図書室で発見されたアラビア語原稿には
巨大すぎたために箱船に乘船できなかつた王と獣についての記述がある

reemというある動物はその巨体故に箱船に乘せる余裕が無かつたので
ノアは舟の外側に革紐でつなぎ
この動物は後からのこのことについて行つた

バジヤンの王オグもまた大きすぎて箱船に乘れなかつたので
箱船の屋根に坐り
そのようにして生命を救われた
巨人オグは大洪水のち五百年間生きながらえたが

モーゼに斧で斬り殺されたという

友よ

夏が去り

雲間から落ちる光もすっかり透明になりました
青銅の蒼穹から滴り落ちてくる光が世界を腐蝕していくこと
それが秋の時間なのです

淋しい世界の腐蝕画を吹き抜けるレシ
タチーヴォ
つまりガブリエルのおおきな翼の下で
安む二人の男の物語
霊の思想家

年代記作者にして
旧ルター派牧師セバスチャン・フランクと

徹底した信仰普遍主義の故にあらゆる
宗派と協調せんとした
宗教的自由の先駆者にして貴族
カスパー・フォン・シユヴェンクフ
エルト

ウエストファリア
ミュンスター駅
聖ランベルティ教会の尖塔の下で
あなたは激しく嘔吐した

なんと立派なことか！
人間の形を保ちつづけるものよ
洪水を生き延びる
君たち
ひとツガイの男女

箱船に同じく避難した夫婦は
虚偽という男と
不幸という女であった
箱船のリーベスコムニスムス
愛の共産主義

デウカリオンひとりだけは
その思慮の深さと信心深さのために生きながらえ
最初の人類と二度目の人類をつなぐ環になりました

おお
なんたる思い出だ！
私の憤りのように巨大な夕日が沈んで行く
迫害者の足にキスを！

○小松正二郎さんの『偽書による自画像』は、「私」に流入してくる書物との格闘が見える作品でした。単に書物から得た「正しい言葉」を語るのみならず、それを「偽書」の屈曲した物語にすりかえています。「偽書」というのは大切な概念です。他のテクストとの関係のなかで、歴史というもつとも巨大なテクストの集合から疎外される言葉たち。のちの権威によって「虚偽だ」と名指される物語。ラザエルという響きはアダムに書を渡したラザエルに「修正」されるかもしれませんし、シナイ山にカタリ派が息づいていたという話は聞きません。reemなんて、古代の誤訳のおかげで、雄牛だから一角獣だか、そもそも確定できない。そのあいまいなイメージにしかし、真実に似たものが宿っていたかもしれない。アダムのほかには人間の起源像があったかもしれないし、天使は悪魔と表裏一体だったかもしれない。山上に赴くモーセの中にはカタリ派的な徹底した人間性と肉体に対する否定が混入していたかもしれない。少なくとも、あえて異端の立場をとって書くものには、外的な権威、既存の真実

に抵抗するだけの自己自身の世界構成があります。いささかフーコーじみですが、権力のあるところには、かならず抵抗があります。わたしは勉強不足で、神学的には、切り詰めたことを言えないのですが、この詩に刻まれている固有名は、カトリックでもプロテスタントでもない人の名です。一見すると和解に見えるウエストファリア等の条約の裏で、「それ以外」の信仰を持つ多くの人々は虐殺され、彼らの書物は「偽物」のレッテルのもとのみ残存します。

この詩の切実さは、洪水を生き延びる人間が、かならずしも生き延びたことによって正しいわけではない、という認識にあります。そして現代のわたしたちも、洪水を体験しつつある。麻生さんの「聞きたくないCD」や「死者」への配慮と、どこかで通じる始末に負えない欠落感やばつの悪さ。「正常な言葉」の流通網からとりこぼされ、孤立した偽書によってしか己の身の丈も計れない。この詩を衛学的だと言う人もあるかもしれませんが、それは自己の不在を一旦受け入れているからこそ立てられた方法でしょうし、神学を（ドイツ農民戦争や再洗礼派のように）人間の実生活の問題として引き受けるから生じる態度だと思います。

それゆえ一点、個人的な問題提起をさせていただくことをお許しいただけるならば、テキストに肉のひきずるような重さや哀しさがほとんど反映されないことは気にかかります。「なんと立派なことか！」以降にそれは顕著です。いづれ告発され否定されるべき肉なのかもしれないけれど、あらかじめ「君たち／ひとツガイの男女よ」という対象化により、肉

（感性的なそれにせよ、不可知なモノとしてのそれにせよ）をもって今も生きてあることの桎梏が捨棄されている感覚もあります。このフィジクスの鎖の断絶が、テキストを統括する精神および情動の制御不可能な全面化をまねいている気もして「私の憤りのように巨大な夕日が沈んで行く」という直喩や後半の高揚感には、一読者として危うさを感じました。これもまた詩の宿業かもしれないと悩みますが。「巨人オグは大洪水のち五百年間生きながらえたが／モーゼに斧で斬り殺されたという／友よ／夏が去り／雲間から落ちる光もすっかり透明になりました」という断絶と接合の静謐な瞬間に、別の可能性を予感しつつ。

かなしみ 前田ふむふむ

夕日が地平に没しても
なお 街々の西の空が
かすかに明るみをおびている
足を止めて
やや赤みがかった
灰白いものを
見ていると
無性に泣きなくなってくる
そのかなしみは
わたしの影だ

あの明るさのむこうでは
花も木も風も
声をあげることはない
生きた足跡を
否定されて
泥のように 沈んだものたちが

ふりかえっている
そして
冬のイチヨウのように
ざわめきもせず
なんの弁明もなく
清々しいほどに 立っている
そのまなざしは
わたしの影だ

わたしが
傷口を嫌い
捨ててきたしがらみ
無為に
置き忘れてきた
ふるさとの声
手にすることが
できなかったものにたいする
後悔と羨望
それぞれの来歴が
なつかしそうに
手を振っている
その姿は
いつまでも
わたしを引きずっている

たぶん
父も母も
わたしもあそこにいるのだろう
そして家族と親しく
夕餉を囲んでいるのだろう
直視するには
神々しいものを
見送るような
測れない大きさになって
しかも穏やかだ
わたしは

夜の先端で
影になっている

戯れる
海の波が引くように
その
心地よさを
受け入れて
わたしという途方もない
ものから
逃れるために
わたしは
灰白い空を見て
涙ぐむのだ

○前田ふむふむさんの『かなしみ』は、丁寧な筆致で、「わたし」と「ふるさと」との距離を描いています。あまりにも有名な「ふるさと」は遠きにありて思ふもの／そしてかなしくうたふもの（「小景異情その二」室生犀星）というフレーズに端的ですが、「ふるさと」故郷」というからには、そこから離れていなければならぬ。しかし、離れすぎていてもいけない。つまり、うたにむすびつく情念への訴えかけがなくてはならない。その意味で、ふるさととは不在でありつつ、その不在によって「わたし」の言葉を惹起します。また「生きた足跡を／否定されて／泥のように 沈んだものたち」のほうに、「わたし」はむしろ実体を見てしまう。ふるさととの分離によって「わたし」もまた空虚なものになってしまふ。故郷を持つことは、逆説的に、欠落を抱くことです。

この詩を単に私小説的な、個人的なものともみなすわけにはいかないでしょう

う。というよりも、あまりに個人的で、「街々」の内部から「西の空」を見上げる「わたし」を描かざるをえないということ自体が、自身を支えてきたもの、来歴の喪失と表裏一体なのかもしれません。「そのかなしみは／わたしの影だ」「そのまなざしは／わたしの影だ」「その姿は／いつまでも／わたしを引きずっている」。

「追想の対象すら、すべて「わたし」の延長でしかないということ。喪失の詩は感傷に流れやすいのですが、前田さんの特性である認識の注意深さ（これは客体に対する自己の意識を放棄しないということでもあります）、あまりにも洗練され、落ち着き払った改行のテンポもあって、この構造は水平線のように揺らぎそうもない。現在の時のエゴの鋳型である過去や土地や他者を失った孤独者、「わたし」の言葉は、自己を中心にして茫洋とひろがってゆきます。この「わたし」の両義的な特性は「途方もない」という言葉で端的に示されています。つまり、道理にあわないほどの巨大化と、一方で、ゆくえのなさ。

この詩のテーマは「かなしみ」なのですが、このかなしみには不思議な特質があります。空の向こうにあったはずのものを追想しつつ「見送る」、そして「戯れる」。そのとき「心地よさ」も生じているのです。これは感傷とノスタルジーに呑み込まれては気づけない感情です。また「わたしは／灰白い空を見て／涙ぐむのだ」。人は泣きそうなとき、こんなに着実な自己観察や断定はふつうできない。つまり「かなしみ」というパトスも、話者の主観性の強さを食い破って、整然とした言葉を乱れさせるようなものでは

なくなっている。しかも、「逃れるために」という言葉からは、どうしようもなく沸き立ってくる感情や涙以前に、「わたし」の意志が顔をのぞかせている。情調と、それを描くもの（またその文体）の剥離もまた、故郷からの遊離の一側面かもしれないと思うのです。

最後に、同じタイトルを詩を引いてみましょう。「あの青い空の波の音が聞こえるあたりに／何かとんでもない落としものを／ぼくはしてきてしまったらしい」「（かなしみ）（谷川俊太郎）。自己に対するよそよそしさと足場のなさ。なくしたものの正体もわからなければ、はつきりとなくしたかどうかもわからない。前田さんの「かなしみ」は、明治以降、過去と断絶し、極度に主體的に生きなければならなくなつた近代人の桎梏、生まれ育つた場所から離れざるをえない孤立者たちの情念に通じています。文部省唱歌の「故郷」は一九一四年発表、室生の『叙情小曲集』は一九一八年刊ですが、故郷をこぞつてうたいはじめたということは、歴史的にその喪失と弔いがはじまったということ。本作において、この断絶の時代の初期にうたわれた帰還すべき「故郷一般」とでもいえるような風物は、すでに極度に衰弱しています（「花も木も風も／声をあげることはない」。谷川さんの「かなしみ」の場合、故郷のイメージの手がかりさえなく、過去は徹底的に透明化しています。新宿中央公園で遊ぶ子どもたちや、モバイルでどこか遠方とつながっている高校生をまなざしながら、前田さんの詩を思い浮かべると、彼らの「灰白い空」の所在を考えてしまうのでした。

諦め 森田直

ほじって取り出すと思ひ出だった
いつの間にか乾いて脳から剥がれ
鼻の穴に落ち着いていたらしい
いかほどかわいいう女の子の記憶も
こうなれば他の糞と大差ない

美しく加工した思ひ出を重ねて
痛々しい傷口を埋めた
眠れぬ夜に頭を開いては
淵をなぞって懐かしんだ
ひと思いに剥がして捨てたら
なにか発展でもあつたか

眺めてみても涙も出ない
糸を引いた惨めな黄土色
出てきた場所が悪かつたか
元からこういう正体だったか
どこまでが本当だったか

頭の調子は存分にいい
内臓も呼応して小気味よい
無念の塊をふるい落として
いずれ正常に戻っていく

指先でこねて懐かしく匂う
これは頬をつたう涙の思ひ出
水玉は未練がましく首筋にしがみついて
あのまっ白いワンピースに潜り込む
胸元、おなか、足の付け根に
もう元に戻ることはなさそうだった

完治間近の私の頭 健全な肉体
食ってしまいたい衝動を捨てきれないま

ま
人差指で弾く

○森田直さんの『諦め』は、かつての恋人の記憶を鼻糞に見立てることで、親しいものからの離別を描いています。心が胸にあると考えられている文化圏で、脳はしばしば「鼻水を流す器官」だと思われていたという話が頭をよぎります。科学的に見れば誤謬なのだけど、前近代的な身体イメージのほう在实际の身体感覚を率直に表現していたりもする。また、言葉の展開には、このアイデアを単なる奇矯さに埋没させてしまわない着実さがあります。不快な喩えを十全に活かしつつ、話者は別れのあと特有の心情の動きを語ります。立場はまったく逆ながら「恋人よ。／たうとう僕は／あなたのうんこになりました。」（「もう一篇の詩」という金子光晴の滑稽さと似た、人間への冷然としたまなざしを感じました。

この「まなざし」は、この詩のテーマでもあります。「眺めて」みることができるといことは「わたし」と対象との間に距離が生じているということです。ひつpegがすことのできなかつた大切な記憶、自分の一部分であつたそれが、ふと、剥離してしまう。端的な事実になつてしまう。言葉でなにごとかを描写するということも、この距離なしにはなしえないのかもしれない。そういう意味では「認識する」という行為の薄情な現実（「他の糞と大差ない」）を、この詩は示してもいます。

その薄情さを露悪的に示す比喻に、眉をひそめる人もいるかもしれませんが。しかし人間はおそらく、この距離感なしには「健全」ではいられないということも、この詩は示唆しています。病根のようになつてしまった記憶を、自然と自身から

切り分けて分析し、価値判断することなしには生きられないのかもしれない。すべての記憶が、現在の自分の内部に存する説明のできないものとして甦ったら、大方の人格は崩壊するでしょう。ただ一方で、よそよそしいものになってしまった記憶、「私」の老廃物に対して、「食ってしまいたい衝動」、いまいちど融合したいという欲望を抱くのもまた人間です。ここに「まなざし」のもうひとつの側面、対象への愛が示されます。この両面性のもたらす葛藤から、目を背けないのが、この詩のよさです。フロイディアンには「肛門期のトラブル」なんて言われてしまうでしょうけれど、詩もまた、記憶への別離であり、記憶への愛です。

以下は作者の志向によることで、森田さんご自身で考えてみていただきたいことです。たとえば一連目、二連目、五連目の「思い出」は、同じ言葉で言い表されているけれど、質が違うものです。「剥がれ」と「剥がして」は、自動詞と他動詞の差を維持していますが、前者の自然さと後者のむりくりな痛さはさらに遠い言葉で表出されてもよいかもしれない。生々しい質感を容れるだけの構成の緊密と人間観察の深さがあるので、もうすこし説明的な語調をゆるめて、具体性を折り込んでゆく方途もあるように思います。

その他の詩にも力作がありました。もうすこしよくなる可能性をどの詩にも感じました。その一部を紹介して本稿を閉じます。とうとうせいらさんの『フローズン・バタフライ』は、ギターを練習する指先の硬化を丁寧に描写していて、「まるで／さいしょから／ゆびなどいきてな

ったみたいだ」というぞくりとするフレーズから、指先にまつわる「あなた」との記憶へとひらいてゆきます。「あなたは／わたしのことも／透徹した音でかなでようと／あのとき／したからうえへと／はやるようにこすりながら／つよくだきしめた／それなのにわたしのからだは／いたみしか感じなくて／あなたの手をおさえてしまった／なにがはじまって／なにがおわって／なにをつたえたのか／つたえられたのか／わからないまま／ただ／しがみついているだけだった」。前作にも感じましたが、とうとうさんの、身体と心がきちんとつながっている感覚、浮き足立たない言葉の選びかたは出色のものです。ただ今作は「あのころ」と「あなた」が、ちよつと抽象的で、せつかくの指先の細密な描写と呼応しあうイメージが結びがたく、もったいない気がしました。

岸本琴音さんの『いえないこと』は、「精密な受信機は増えてゆくばかりなのに／世界の出来事は一日でわかるのに／知らないことが多すぎる」という「彼女」の言葉で開始されます。「鳥が鳴けば 何の鳥かとすぐ画面に手が伸びて／せわしい朝 ほんとうは鳴き声につられて ただその真ん中で歩みを止めたいだけということ／気づく人は減ってゆく」。情報は、情報が示すそれそのものの経験ではないのだけれど、生身の感覚によつてそのものを知る以前に、つい調べてしまう。画面から目上げたときに、もう鳥はいないかもしれないのに。多様なラグや言い難さ（たとえば「狂った真夏のなかにふいに見える寒さ」）を含む自前の経験は、情報の雄弁の前に、だんだん信じら

れなくなつてゆく。そんな現代の希薄さを感じました。一方、話者と「彼女」とのあいだにある距離や空気感が読み取れず、終結部の「いえないこと」を、残念ながらうまくつかみきれませんでした。

中川達也さんの『焼香』は、秋という季節をAutumn（收穫祭）にとらえず、あくまでFall（没落）としてとらえる田村隆一の姿勢から、自己の詩を反省した意欲作です。「これは詩ではなく／ただの文字の羅列に過ぎない／ならば／亡の精神を宿せばいい／苦しみからうみ落とされた文字は／秋の手紙となつていつか誰かに届く」。田村の場合、歴史の收穫期と見えていた近代成熟期が、実は荒廃と没落の始まりであつたという二重性を思考しています。つまり生まれ落ちる（Be）時点から、そもそも死への落下が開始される両義性を帯びざるをえない時代……すこし問題だな、と思つたのは、「ならば」という接続詞ひとつで、詩語がこの時代精神にひるがえることができるのかどうか、またその残酷を肯定しうるのかということでした。ラストに響く生死のボーダーを超えた笑いなど、大づかみの構図は鋭いもので、もうすこし、詩語自体の細部にいたる彫刻を通じてなされる思索が読みたいのです。

山崎修平さんの『井の頭線午後二時四十二分吉祥寺行き』は、身辺雑記の聖化と言えるものでした。葛藤や欠落感を書く詩が多いなか、この明るさと肯定性はまぶしく見えました。そして、この肯定性なしには詩語にのぼつてこない諸存在の戯れを感じます。たとえば「おっさんが竹輪をおかず缶チューハイを飲んでいる井の頭線」「ミヤンマー料理の店

主によるカラオケ天童よしみの一オクターブ下げ」「自転車泥棒にいつも間違えられるから泥棒じゃないって書いてあるTシャツを着ても職質」なんて日常の細部は、山崎さんが詩にしないとい誰も書かないかもしれない。大卒の時代が暗澹たるものであつても、生きていれば笑っちゃうようなことは起こりつづける。そんなまなざしの確かさがあります。ただ最後を「バカだよなあ／何か良いなあ／とても良いなあ／（このカフェオレは最後までとても美味しい）」で閉じてしまうと、なんだか個人的な感想として出来事を私有化してしまう気がします。事物たち、出来事たちは山崎さんの言葉を通じて輝いていますから、かれら自身に最後までバカらしく自画自賛させてもいいのではないかな、と。なんでもないとかわれがちな存在の生命を躍動させる筆致に、信頼を置きつつ。

「詩の教室」講師 小林レント
一九八四年生まれ。詩集『いがいが』（ミッドナイト・プレス）。

*投稿規定

・宛先 mpwebclass@gmail.com（テキストファイルまたはワードの形式でお送りください。）
・一人三篇以内

・次号（第九号）の教室では、二〇一四年一月三十一日までに投稿された作品を対象とします。

・すぐれた作品を継続的に投稿された方については、編集部で判断の上、いずれ小特集を組みたいと考えています。

一頭の座礁したザトウクジラがついに死んだ

我々はその巨大な体を取り囲み狂喜し、抱き合い、泣いた

原子力発電所が爆発してから久しいが

よくわからない

西暦何年の夏だったのか

我々が結縄で

地球の立ち入り禁止区域に迷込んだ一頭の

灰色の鯨のことを記したのは

これは台湾の詩人、許悔之の「座礁した鯨」島田順子訳、『シリーズ台湾現代詩Ⅱ』（国書刊行会、二〇〇四）所収）である。「結縄」とは、訳註によれば、「文字のない社会で縄の結び方により事柄を表現したり記録したりすること」とある。ネットで調べると、中国、インカ帝国、エジプト、中南米などで広く用いられていたという。沖縄では二十世紀初頭まで「藁算」と呼ばれ用いられた。いわば遠い「言葉のない世界」で使われた記号である。

九月末に短い台湾への旅をして以来、私はこの詩人に取り憑かれている。一読して決して難解な語法は見つからないが、実に難解極まりない。ただなぜかいつも読後に納得をしてしまうのである。たとえばこの

詩の場合、詩人は明らかに原発という政治的テーマを前提に書いている。しかしどうもこの詩からは政治的メッセージが伝わってこない。なぜ「鯨」が死に、なぜ「我々」はそれに「狂喜」し、そしてなぜ「結縄」でそのことを記しているのか。（ちなみにこの詩が収められている詩集『鯨となつて海を渴望する』は一九九七年に刊行。八十年代に原子力エネルギーへの依存が高まっていた台湾では、チェルノブイリ原発事故後の九〇年代に日本からの原発輸入への反対運動が起きていた）

最初に私の頭に浮かんだのはメルヴィルの『白鯨』である。メルヴィルが描いた人間中心主義（またはアメリカ中心主義）の狂気性が、最後には「白鯨」＝「神」に滅ぼされるという神話を逆転させれば、この詩はついに「白鯨」＝「神」を殺すことに成功した人間の狂気性の勝利の瞬間を描いていると読める。だから「狂喜し、抱き合い、泣い」ているのである。鯨は神性を象徴する「白」ではなく「灰色」である。メルヴィルの生きた十九世紀から百年、原発の爆発という狂気の所業によって「神」は殺された……。

しかしこれではまだ安易な解釈である。そのような「原発詩」は、福島第一原発事故以降、日本でもあまた書かれてきた。

おそらく誰もが読んでいて奇妙だと感じられるのが、二連目において妙な時間の歪みを見せている点である。それは「結縄」のただ一語によってもたらされている。これによって原発が爆発した現代を、詩人は一気に「言葉のない世界」＝「古代」に変換してしまっているのである。

つまり、この詩が書かれている時代を西暦三〇〇〇年だと仮定するならば、私がいまここに記している言葉などはもはや古代の廃墟のなかで無と化し、ただ「結縄」のみが発掘される。では誰がこの「結縄」を編んだのか。「我々」である。しかも「よくわからない」うちに、おそらく「神託」として編んでいる。いったい何のためにか。

このように考えていくと、この僅か十行の詩の内部には、そら恐ろしい詩人の認識が凝縮されていることに気づく。詩人によるならば、遠い未来から見返すとき、我々は「神なき時代」を生きているのではない。むしろ原子力という「神」に代わるはずの現代の科学技術の崩壊によって、我々の「神なき時代」という認識が瓦解し、「神」は復活したのである。

もう一度詩を読んでみる。どうやらはじめに「我々」が「狂喜し、抱き合い、泣い」ている理由は、メルヴィルの『白鯨』＝「神」を滅ぼしたからではなく、逆に「神」の存在

を見出したからだと読める。では「我々」は再び科学以前の時代の「神」との共存の世界へと戻れたのかといえ、それは違う。そこには「神」の「屍体」があるのみである。パンドラの箱を開けてしまった人類は、もはや自らの手で分断してしまった「立ち入り禁止地区」にのみ生きざるを得なくなっている。いわば永遠に「神」から見捨てられた存在になり、「我々」ができることは、ただ神託としての「結縄」を編むのみである。そしてこれこそが現代の詩人が残すべき、言葉以前の「詩」であると、詩人は述べているのである。あくまでこれは私の解釈であるから、人によつてはこれを反語的表現による、原発の恐るべき姿を描いた「原発」の詩と捉える人もいるだろう。それも正しい読みであろう。しかしもはや後戻りは不可能であるという「諦念」の詩とも取れる。いずれにしても、私にはこの詩は、「原発」如何を問わず、その政治性がまったき神性と一点で固く結ばれた詩として驚きながら読んだ。

許悔之は一九六六年生まれであるから、詩「座礁した鯨」は三十歳前後の作と言える。台湾では早くから若手の旗手として頭角を現し、邦訳では上の詩を収めた国書刊行会『シリーズ台湾現代詩Ⅰ・Ⅱ』と思潮社『鹿の哀しみ』（三木直大訳、二〇〇七）

が出ている。他国にも翻訳が幾つか出始めているので、今後の台湾の詩を担う詩人として注目されていると言える。この三冊を読んだ限りでは、仏教用語を多用する詩が多く仏教徒ではないかと察するも、台湾人は概ね仏教信仰が強いものであるから、分らない。少なくとも右の詩のように許悔之は現実と信仰との間に生まれる「捻れ」それ自体を描くゆえ、単なる宗教詩人とは言えない。むしろ真つ向から政治的テーマに對峙する。例えば次の詩もそうである。アウン・サン・スーチーについての詩「肉体」の最終連を引く。

「あの若い兵士たちは／私が軟禁されている場所の外で／煙草に火をつけた／腹の足しのためなら／空の星を煮て食べても／仏陀は彼らを許さだろう／過ちを犯した自分の子を慈しむように／このたび、私は飢餓を選んだ／輪廻の中では／ただ仏陀だけが／実り豊かな五穀を刈り取ることでできる／食を断ち、食を断ち／身を捨て虎の餌となる／仏は言った
生命はとどまらない／一つの灯火や二つの灯火に／太陽がいまだ照らさぬ場所／情愛を絶やさぬことを誓い／飢える衆生となることを願う！／沈黙する仏陀の目の前で／完全なる魂が／彼と同じように私の／干からびた肉体を撫でる」

訳書では先の「座礁した鯨」の次に掲載されている。これなどは明らかに政治的事件を仏教的世界観によ

って覆ってしまっているように見えるが、興味深いのは最終行「干からびた肉体を撫でる」というエロティシズムをさへも醸し出す、場合によってはスーチー氏への冒瀆とも取られる危険性を孕んだ結末である。詩人はやはりどうしても現実と、さらには「実存」と宗教性を一点に結ぶ。このような詩を私は初めて読んだ。とはいえ、私がこの詩人に惹かれた理由は明瞭である。これまでこの連載でも書いてきたように、己の詩の磁場というものを探るため、生まれ育ったこの「日本」という国家と、私もそのひとりである「日本人」という国民とは何であるかを問いた

せるならば、当然ながら、実存は極めて単純な外在物としてしか捉えきれなくなる。いや確かにその方が分かりやすく、生きやすい。たとえば最近、東浩紀氏が「福島第一原発観光地化計画」という、「3・11」を風化させない運動を起しているのを見る。氏の実践哲学と行動力には瞠目するが、私はこれを肯定しない。モニュメントは確かに記憶を風化させないが、しかし人々の個々の内部に残るはずの記号化し得ない「傷」を同一化してしまふ。そもそも東氏自身が思想家としての己の実存への問いを「事業家」として外在化させることは、思想が利権に敗北する結果を招くと考える。

だからこそ、かつて日本の支配により「傷」だらけとなった民族の詩人に、いま日本人の私は返り血のごとく教えられるのである。まぎれもなくあの「鯨」は私の内部に引かれた「立ち入り禁止地区」に座礁したのである。そして詩人はその「鯨」が何を見たのかをも教えてくれる。

美

ぼくは嫌になった 人に
人に死にたくなるほどの美を説明
するのが
使い古しの言葉など
はじめから何の意味もない
ぼくが独りで北極に入って
凍りついた光を目にし
千尋の海底に沈み
その美ゆえに
こらえ切れず声を上げて泣いてし
まうような
群を離れた一頭の鯨が
目撃した 誰も見ることでできな
い美

美

すことを命題としてきている。つまり極めて政治的な意識を実存的なレベルまで落として問いたのだということである。逆を言えば、そのような意識をもたずして三十代半ばまで過ごしたお気楽な私がいたのである。これはそれまで政治意識の呪縛から解放されていたというのではなく、戦後民主主義の擬似的な「自由」の呪縛であったと認識している。「3・11」によってそのことに私は気づいたというお粗末さである。

しかしである。この「3・11」をひとつのモニメンタルな記号として流通させているメディア全般には私は違和感をもつ。そこには何かのすり替えがあるように思えてならない。つまり己の実存への問いを、そのような記号として単純に外在化さ

ついに「3・11」も、「日本」も、「実存」も何もかもすべての言葉が私のなかの深海に消え去るとき、「凍りついた光」が差ししてくる。そして私はこの世から消滅する。しかしその日のために、今後とも台湾への詩の旅をつづけ、結縄の編み方を学ぼうと思っている。

飯島耕一の詩を読む

岡田幸文

飯島耕一氏が十月十四日亡くなったというニュースを聞いたとき「戦後詩」というシニフィアンがついにフェイドアウトしていくような気分に見えた。この「昭和五年生まれ」の詩人の死は「戦後詩」がほんとうに終わったことを告知しているように思われてならない。

他人の空 飯島耕一

鳥たちが帰って来た。
地の黒い割れ目をついばんだ。
見慣れない屋根の上を
上ったり下ったりした。
それは途方に暮れているように見えた。
空は石を食ったように頭をかかえている。
物思いにふけっている。
もう流れ出すこともなかったので、
血は空に
他人のようにめぐっている。

「敗戦前後の、緊迫感と虚脱感の奇妙にまじりあった、うす汚いが昂奮した時代と、戦後の焼跡と闇市場的風景のなかで、自我の覚醒期をむかえた」詩人の年譜を見ていると、次のような記述がある。

「一九四二年(昭和十七年) 岡山県立第二岡山中学校入学。三年のとき、勤労動員で造船工場に行く。鋳物工として特殊

潜水艦の部品をつくっていたが、一つもものにならなかった。四年になって、陸軍航空士官学校を受験する。六月、B 29 の空襲で岡山市の八割は消失、一切灰燼となる。八月はじめ、航空士官合格、八月二十日入校の通知があった。八月十五日、(中略)終戦の詔勅の放送をきく。航空隊に入るつもりになっていたので残念に思った。岡山の聯隊の兵舎のまわりを歩き「徹底抗戦」の貼紙を見る。」

実に、情報量の多い記述である。「航空隊に入るつもりになっていた」とは、後の「空」の詩人を予感させるではないか。「他人の空」が書かれたのは、一九五三年の夏であったが、「戦後」の不安、放心が刻印されたこの詩が、「戦後詩」のモニユメントのひとつであることは否定できないであろう。

飯島耕一氏の詩と死について、考えることはいろいろあるけれども、いまは「青空と胃酸」という詩と向かい合ってみたい。この詩は、「詩の雑誌 midnight press」31号(二〇〇六年三月)に掲載された。

青空と胃酸 飯島耕一

空は青い
朝 大量の胃酸を吐いたあとのように
この不信と不安の世紀にも

空は青い
焚燐の心の妖魔
人というもの

放てば妖魔

放てば妖魔
吠いてみる
放てば妖魔
放てば妖魔

わかるな わかるね
心寒くなり

彼かならず神に引裂き捨てられんぞ
との声に送られて 西の国伯耆から
悪徒焚燐は 足早く
いたるところで魔の言うなりに立ち働

下野の那須野の原で ついに一人の
僧にめぐり合う
この僧の与えてくれた一分という金銭の
まごころに

悪徒は一瞬間に別天地に生まれ変わり

心寒くなり
ただ寒くなり
凛然として仏心を得る

大量の酸を吐き
何ものかに突然叱責でもされたかのよう
に
酸を苦しく吐いて 恐ろしくなった朝

それでも空は青く

そんな日に
もう一人の男の影が
眼前を過ぎった
一人の俠客で詩人だった男だ

幕末の四国琴平に
日柳長次郎という男がいた

俠客というから
尋常の詩人ではない
人を脅したことも
あったかも知れない

その男が
死ぬ二年前の
高杉晋作二十七歳をかくまった

このため長次郎は
高松藩の捕われ人となった
明治にかけて四年ものあいだ

高杉は自分の墓に
「西海一狂生」と彫ってくれと願
墓前に芸妓御集め
三弦など御鳴し下されと
言い残した

焚燐の物語の作者 元大坂商人の狷介な
上田秋成は 自らを
「洛外半狂人」と称した

朝 大量の胃酸を吐き
顔を上げると
空は それでも青い

冒頭の二行、いかにも飯島耕一的なフ
レーズである。いまは、一九五三年に書
かれた「空と汗」という詩のエピグラフ
を引いておきたい気分だ。

私は空を描かねばならぬ。
空は自ら自身なのだから……

続く「朝 大量の胃酸を吐いたあとの
ように」から「この不信と不安の世紀に
も」への詩行の流れは、これもまた飯島

耕一の通奏低音をなすひとつである、現実への異和の持続的な表出であろう。

空は青い
焚噲の心の妖魔
人というもの

ここから展開部である。冒頭の「空は青い」という一行で、バタイユの「空の青」が一瞬過ぎつつが、「青空と胃酸」は、おそらくバタイユとは関係なく(?)展開していくだろう。詩人が向かうのは「江戸」という時代である。それにしても、いきなり登場する「焚噲」というコトバには意表を突かれる。これは、詩の終わりで明かされるとおり、上田秋成の『春雨物語』に収められた「焚噲」という物語の主人公のことである。手短に云うと、この焚噲、親兄殺しにして強盗という稀代の悪徒なのだが、あるとき「下野の那須野の原で ついに一人の僧にめぐり合」い、「この僧の与えてくれた一分という金銭のまごころに」「一瞬間に別天地に生まれ変」ったという人物である。ここがどう書かれているか、原文を引くと、「手にすゑしかば、只心さむくなりて、『かく直き法師あり。我、親兄をころし、多くの人を損ひ、盗みして世にある事、あさましあさまし』と、しきりに思ひなりて、法師にむかひ、『御徳に心あらたまり、今は御弟子となり、行ひの道に入らん』と云ふ。」とある。この物語の頂点はここにあるだろう。それにしても、稀代の悪徒の回心がこのように一瞬間のうちになされるものだろうか。ここは大いに考えたいところだが、ここに「洛外半狂人」たる上田秋成の「思想」を見たいという気分にもなる。上田秋成は、物語の最後、焚噲に「遺偈と云ふは、

皆いつはり也。(略)我は(略)しかじかの悪徒なりし。ふと思ひ入りて、今日にいたる。釈迦、達磨も、我もひとつ心にて、曇りはなきぞ」と語らせた後、こう記す。「心をさむれば誰も仏心也。放てば妖魔」とは、此の焚噲の事なりけり。」

シュベルヴィエルを読み、「ぼくはシュレルアリストたらんと思う」と書いた飯島耕一が、なぜ「江戸」に向かうようになったのか。これは飯島耕一を考えるうえで、素通りすることはできないテーマである。その理由はいくつか考えられるけれども、いつの頃からか、originを尋ねるということが、詩人の大きな主題のひとつになったと思われる。originとは、詩の(日本近代詩の)originであり、詩人の(「私」の)originであり、「魔物」のoriginである。この「青空と胃酸」という詩を読んで、読み返した詩集は、『他人の空』、『何処へ』(を含む『ウイリアム・ブレイクを憶い出す詩』)などいくつかあるが、あらためて読み直したのは、一九八〇年に出版された『上野をさまよって奥羽を透視する』という一巻である。とりわけ、「御茶の水の橋上にあつて江漢を憶う」「上野をさまよって奥羽を透視する」「品川 大井の旅」は、いずれも力作としか云いようがない長編詩である。その詩集の「あとがき」で、詩人は書いている。

「ボードレールがパリを描いたように、エリオットがロンドンをうたったように、何とかわれらの都市、東京をテーマとする詩が書けないものか、というのは積年の思いであつた」

そこから 浜松町に戻り

竹芝棧橋まで歩いて行った
わたしはなおも東京湾の水を確かめる
つもりになつてゐる

竹芝埠頭は浜松町駅から六分
奥まった東京湾にある

ここにもこの日つよい風が吹いていた
そして待望の潮の香がした 思いがけ

ぬ感動がやつて来た
滅亡しきれぬ江戸の潮の香を嗅いで
わたしははじめて納得した

立ち去りがたかつた

潮の香は滅びきれぬ歴史の生命体のよ
うにわたしの鼻腔を刺激した

歴史というものはつんと来る何かの生
命体であつた

江戸と現在をつらぬくバネのようなも
のであつた

歴史よ！

こうして「品川 大井の旅」のコーダの一部を書き写していると、止まらなくなる。飯島耕一の詩を根拠づけることばのリズムが身体を包み込んでくるのだ。このとき、飯島耕一、五十歳。思い出すのは、かつて詩人が記した次のようなことばである。

『おそろるべき現実に虚構をまぜあわすことに私は執する』というエリユールの詩句は、ぼくに靈感を与えた」

あるいは、

「詩はいつでも、バラバラのものを一つにしよとする欲望として、ぼくのまえにある」

ここまでくれば、この「青空と胃酸」

という詩の半分(?) ほど、見えてきたような気がする。というか、日柳長次郎「俠客で詩人だった男」! がどのような人物であつたのか、高杉晋作がどのような人物であつたのか、はたまた上田秋成は……などと考え始めると、「大量の胃酸を吐く」ことしか残されていないだろう。ここはむしろ、詩人の「夢見る権利」にいなされるようにして、われわれもまたこの「超現実的」(「時空を遊行することは運動に身をまかせた」。

心寒くなり
ただ寒くなり
慄然として仏心を得る

低い声で、ひそやかに歌われるこのアリアに秘された「詩」に思いをいたすとき、「空は それでも青い」という終行が沁みてくる。



★ルー・リードが十月二七日に死んだ。特に衝撃というほどのことでもなかったが、青春の暗い時代、部屋でルー・リードを聞きながら、ウィスキーに溺れ、詩を書いていた日々を思い出した。もしかしたら、ルーの音楽がなければ詩などは書かなかったかもしれない。それほどその音楽と詩に浸っていた。十一月、横浜・関内の中島古書店で開かれた「ミッドナイト秋のお茶会」では、参加者が好きな詩を持ち寄って語り合ったが、大好きなルー・リードのアルバム『ベルリン』から「ベッド」を訳して持って行った。その最後の一節を載せる。

夜、ここで、彼女は頭を横たえ眠った
俺たちはここで抱き合った
蠟燭のまばゆい炎がひとつゆれていた
そして彼女は手首を切った
あの不穏な 運命の夜に
俺はただ言った なんていう気分だ
なんていう いい気分なんだ と……

このような詩が「ベルリン」とどう関係するのかといえば、このアルバムが作られた一九七三年当時（私が生まれた年でもある）、ルーは東西に分断されていたその政治状況を、自らの実存の内部に「内在化」したのである。自身と、ジャンキーの娼婦の恋人との分断された物語として。まさに詩人である。結末は恋人の自殺によって幕を降ろすが、なぜかそのメロディは美しすぎる。いまもこのアルバムを夜毎焼酎を飲みながら聞いている。

★3ページに載せました来年一月二五日の「ミッドナイト新春お茶会」では、八木幹夫さんの西脇順三郎についての講演を受けて、フリートークではパネリストと参加者双方の議論をしたいと思っています。またその後の朗読会は、詩の朗読以外でも、語りたいことがあれば何でも大丈夫です。多くの方とお会いできるのを楽しみにしています。なお当日の準備片付けのボランティアも募集しています。では、よいお年を！（中村）

★考えてみると、「私は考える。ゆえに私は存在する」に現われる「ゆえに」ということは、ずいぶんと強引な接続詞ではないだろうか。なるほど、「私は考える」ということは、なんとか自覚できることではある。まさにいまこうしてなにごとかを書き記そうとしているのは、なにごとかを「考えて」いるからに違いないだろう。けれども、いまこうしてなにごとかを「考えて」いるからといって、果たして、「私は存在する」と云えるだろうか。いまの「私」には、「私は存在する」と確信をもつて云うことなどとてもできないような気がする。このようなことを「考える」とき、思い出すのは、ランボオの「私が考えるというものは間違いで、人が私を考えるというべきでしょう」ということばである。あるいは、石原吉郎の「詩がほくを書きすてる日が、かならずある」ということは、なぜ midnight press WEB を編集発行しているのかといえば、詩が、そうさせているのだとしか云いようがない。そう「考える」ときがある。「結局、

あなたは自分の原則として主観的な詩しか見ていません」と書かれたランボオの手紙を読み返しつつ、「私」についてさらに「考えて」いきたい。そこに「私」はいないけれども

★今号は、第六号の midnight summer poem collection に続いて、winter poem collection を掲載した。ミッドナイト・プレス版アンソロジーを目指して、まずは春夏秋冬の詩から始めようというものだ。さらに、時間的にも空間的にも広げていきたい。時間のかかる作業となるだろうが、これはミッドナイト・プレスのミッションのひとつである。

なお、「詩の図書館」、鈴木志郎康氏と井坂洋子さんの詩の収蔵作業が遅れているが、できるだけ早く収蔵するべく鋭意進めたいと思います。

★飯島耕一氏が十月十四日に、そして辻喬氏が十一月二十五日に、亡くなられた。目に見えないところで、いま世界が大きく変貌していることを実感する機会は少なくないが、両氏の訃報は、目に見えるかたちで、いまわれわれが生きる世界が大きく動いていることを知らせるものであった。飯島耕一氏、辻井喬氏のご冥福をお祈りいたします。なお、飯島氏の詩と死について思うところを別記した飯島耕一氏の『白紵歌』が小社から刊行されたのは二〇〇五年。あれからもう八年が経ったのか。

★midnight press WEB を創刊して一年半が過ぎた。隔月刊から季刊へと、発行速度の感覚をつかむのに時間を要したが、

ここにきてようやく落ち着いてきたように思う。小林レントの「詩の教室」も快調に動き始めた。これからはデュアン・オールマンのスライドギターのように、軽快にインプロヴィゼーションを展開していきたいものだ。読者諸氏のさらなるご支援をよろしく願います。どうぞ、よいお年をお迎えください。（岡田）

○今号の執筆者

近澤有孝 一九六〇年生まれ
福本順次 一九四九年生まれ
浅野言朗 一九七二年生まれ
小林レント 一九八四年生まれ

*編集室から

○ミッドナイト・プレスの詩集
祝魂歌 谷川俊太郎編 二七〇〇円
詩の話をしよう 辻征夫 二二〇〇円
ぼうふらに掴まって 川田絢音 二二〇〇円
生の泉 中村剛彦 二〇〇〇円
＼＼＼窓の分割 浅野言朗 二〇〇〇円
出版目録ページはこちらです。
<http://www.midnightpress.co.jp/publish/index.htm>

○詩の図書館

ミッドナイト・プレスのホームページでは「詩の図書館」をオープンしています。現在、伊藤比呂美、井上輝夫、入沢康夫、川崎洋、川田絢音、清水哲男、辻征夫、中江俊夫、倉田良成各氏の初期詩篇を読むことができます。いま、鈴木志郎康さんと井坂洋子さんの初期詩篇の収蔵作業を進めています。

○自費出版のご案内

ミッドナイト・プレスでは、詩集をはじめとして、様々な書籍の自費出版をお引き受けいたします。どうぞ、お気軽にご相談ください。自費出版のご案内をお送りいたします。